若き島崎藤村とその周辺

——広瀬家と恒子との関連において——

垣田時也

これは『春』の四十六章で、青春の苦悩と放浪の果に「旅で死なうとまで考へて家出をした」捨吉が「もう一度『世の中』へ帰らうと思ひ直し」、「それなら何処へ帰る、といふことに成」って、「道は左様容易く見当らない」ため、あれこれ悩んで「琵琶湖に近い蜂子の生家で受けた親切を」思いだし、あの「静かな田園生活の方へ」「便って行かうとも考へ」ている場面である。この「蜂子の生家」を『眼鏡』では

神戸のお正さんの生れた家は江州の田舎にありましたが、折角来た序に、自分の故郷の方も見物して行って呉れ、とお正さんに勧められまして、旦那は高知から戻ると直ぐそちらの方へ向ひました。

「ポツ、ポツ、ポツ、ポ」

汽車で行けば奈様な田舎でも造作ありません。

一

琵琶湖に近い蜂子の生家で受けた親切を未だ岸本は忘れずに居る。そこは江州瀬多の町はづれに在る。蜂子の弟といふ人が若主人で其家をやって居る。この人と蜂子とは異腹の姉弟であったが、性質は似通ったところがあった。丁度蜂子が西京から来て居た頃、岸本はこの姉弟に導かれて、亡くなったとかいふ兄さんの遺した事業、多くの蔵書、それから果樹の多い畠、花を植ゑた裏庭なぞを見たことがあった。家族の人々と一緒に鮒ずしを食ったことも忘れ難いことの一つであった。岸本の心は斯の静かな田園生活の方へ向いた。彼は瀬多へ便って行かうかとも考へた。

お正さんの故郷は、静かな村でした。そこで江州名物の鮒鮨の御馳走に成ったり、多勢して安土の古い城跡を見に出掛けたりして、やがて旦那はお正さんの家の人達に別れを告げました。いろ〳〵御世話に成った礼をも述べました。

というふうに描いている。

もちろんこれらは小説として形象化されているのだから、当然にいくつかの点で事実とは喰い違っている。然し藤村がこのように繰返し作品化せずにはいられなかったところに「峰子」や「お正さん」として登場する広瀬恒子とその家族から受けた親切と、「江州の田舎」の「静かな田園生活」とが、いかに若き日の傷ついた藤村の心を温かく包みこみ、また優しい平安を与えたかを物語っているのだといっても過言ではあるまい。

いや、それどころか、藤村の青春を最も鮮やかに色彩ったといわれる佐藤輔子が、「春」の中では、当然にきわめてポジチブに描かれ、したがってまた、ほとんどの「藤村論」の中で華かな位置が与えられているのに比して、きわめてネガチブにしか取扱われていないこの広瀬恒子が、不思議なことには、そのどの藤村の長い精神の遍歴と文学形成の営みの中で、いつしか二人の立場が入れかわり、むしろ恒子のほうが、藤村の追憶の人として懐かしく描かれるように変化しているのに気づくのである。

ちなみに、藤村の人生と文学に重要な意味をもつ関西漂泊を童話の形式でたどり直した『眼鏡』の出版は、新生事件のそれこそ渦中の大正二年二月で、死をも覚悟したパリ逃避行の直前であることに注意する必要があろう。このことは、いってみれば藤村の生涯を鮮烈に横ぎった二つの劇的事件、すなわち後者の新生事件の追いつめられた絶体絶命の中で、前者、つまり青春の危機であった関西放浪を思い出し、それを作品化することで必死に脱出の方向を模索するというあの藤村独自の方法の結果として生まれたものであるが、問題はそれが広瀬恒子との出会いを契機として展開する旅であったということである。

もっともこれは、藤村にとっては、結局、広瀬恒子の方が佐藤輔子よりも、その与えた影響が大きかったということではなく、恒子の面影を輔子のそれに比して、むしろ歪めて描いた『春』の中で、然もなお「峰子は同情の深い、母親らしい温味のある女であった。」と書かずにはいられないような、恒子の人間的な抱擁力と献身的な親切さとが、そのどの藤村の苦渋にみちた人生に長く尾をひき、思い出の中で懐かしい追憶の人として成長していって、危機の日に甦っては藤村に勇気と慰めを与える続けることになったのではあるまいか。

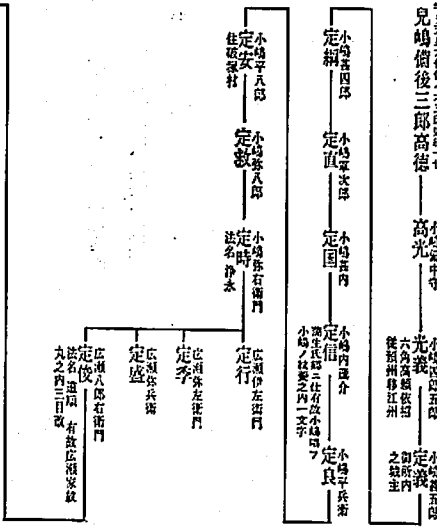
然しながらこのように藤村の人と文学に重要な役割を荷っている

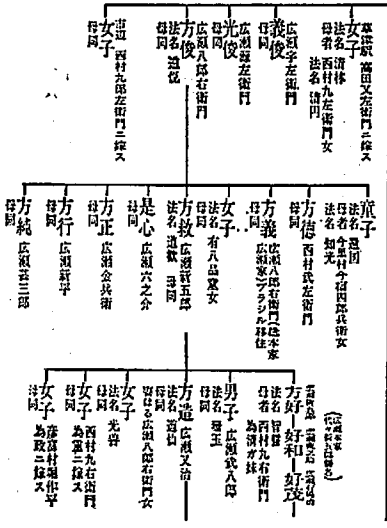
広瀬恒子については、その藤村文学との関連においても、また恒子の実家である近江の広瀬家と恒子自身についても、今迄何程の研究もなされていないといってもいい状態である。そこでこの小論では、広瀬家の家系と恒子に焦点を絞って、現在迄の調査した資料により、藤村文学の周辺の一つの問題点を解明してみたい。

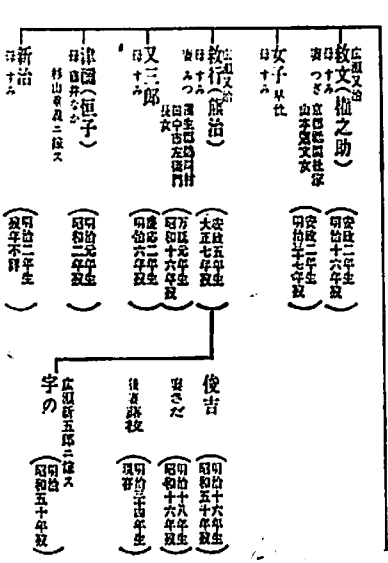
二

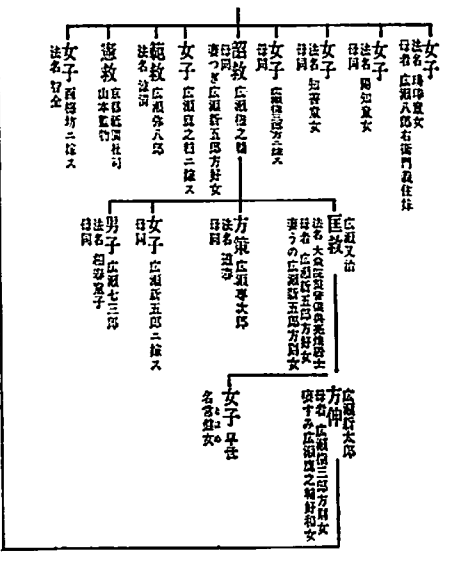
さて広瀬家については、本家広瀬家（現在は大阪府高槻市安岡寺町三ノ二三ノ十七に転居している。当主広瀬雄一氏は大阪市立大学教授を経て桃山学院大学教授である。母は分家広瀬家から嫁した宇の、つまり恒子の姪である。）に現存する広瀬又治匡救の著した「家譜書出」一巻と、分家広瀬家（南広瀬というのが市ノ辺の通称で、現在は同じ滋賀県八日市市の市ノ辺の千八番地に転居している。当主は恒子の甥にあたる俊吉の未亡人広瀬露枝氏で、茶道、華道の師範である。）に伝わる「沙沙貴系図」一巻、「広瀬家系図」一巻、広瀬又治匡救著「家譜書出」一巻、「南広瀬家譜」一巻、「南広瀬家譜」一巻がその家系を今に伝えているのである。

そこでこれらの「家譜」を比較検討し、不明をただして広瀬家の家系をまとめてみると、次のようになる。









つまり広瀬家の出自は佐々木源氏で、宇多天皇の八代佐々木秀義の三男盛綱七世の児嶋備後三郎高徳の孫小嶋四郎五郎光義にはじまるのである。そしてこの光義の代に「六角高頼依招従予州移江州」とあるので、光義の時代に伊予から近江に移り住みついたものと思われる。予州については佐々木三郎盛綱が源頼朝からその功により讃岐、越後、上野および伊予半国の守護職に補せられたことと関連があると思われるが、今後の調査にまちたい。六角家については周知のとおり宇多天皇の九代佐々木信綱が、近江守護職と佐々木家総領職を三男の泰綱に与え、佐々木庄小脇の本邸および京都六角東洞院の館と愛知川以南の近江六郡の地頭職をゆずり、その子孫が六角佐々木を名のったにはじまるのである。したがって佐々木源氏の嫡流はこの六角家ということになるのである。然し信綱は遁世するに先立って、四男氏信に、坂田郡柏原の別邸と大原庄、田中庄を除く愛知川以北の近江六郡の地頭職をゆずり、京極高辻の館を与えたため京極佐々木を名のり、遂には本家嫡流の六角佐々木に近江支配の主導権をめぐっての争いを起すようになり、ために鎌倉時代から室町時代へかけ同族の六角、京極両家が血で血を洗う戦乱の悲劇を繰返すことになるのであるが、これはすべて佐々木信綱の家督分譲の不手際に端を発しているのである。

ところで広瀬家の祖である小嶋四郎五郎光義は六角高頼の招きで

予州から近江に移ったとあるが、高頼は応仁の乱をかきまわした乱世の英雄で、京都に近江に甲賀にとそれこそ職いに明け暮れた毎日を送った人物であったから、一人でも血縁の味方がほしかった筈で小嶋光義の近江移住もそのことと深い関係があるものと思われる。それも光義の嫡子小嶋甚五郎定義を「御所内之城主」と家系にしるしているところからみると、六角家の縁者であるため重臣として招きよせたものだろう。六角家の菩提寺である安土の浄厳院にこの時代の小嶋家の墓が残されているのも、これを証拠だてるものだと思われる。ともかくも小嶋家は伊予から近江に移って先ず安土に住みついたのである。

御所内の城主小嶋定義から数えて五代目の小嶋内蔵介定信の代に蒲生賦秀氏郷の家臣にかわっているが、これは六角家が義弱の代に重臣の後藤但馬守父子を謀殺し、ために他の重臣らがこの処置に怒って、安土の観音寺山の各自の屋敷に火を放ち、それぞれの居城に立ち退いた所謂後藤騒動移後とみに六角家の力が衰え、かわって蒲生家が台頭してきたことと何かの関連があろう。そしてこの小嶋定信の孫小嶋平八郎定安の代に、永住の地である破塚村（現在の八日市市の市ノ辺）に移住しているのである。

三

広瀬家の「家譜」には、小嶋平八郎定安の代に「住破塚村」とある。破塚は現在の滋賀県八日市市市辺町で、古代は「日本書紀」や「万葉集」の額田王の相聞歌にみえる蒲生野の中にあり、「市辺之忍歯王」の墓があるために「市ノ辺」と名づけられたという。然しこの墓が盗掘されたためか、主として近世に破塚村ともこぼし塚村とも呼ばれ、塚をはさんで村は東西に分かれており、明治に蒲生郡市辺村となり現在にいたっている。だが、この小嶋定安が何故破塚村に転居したかについては定かでない。ただ六角佐々木の本居があった近江佐々木庄小脇は破塚村の近くであるから、近世から近代へかけて広瀬家がこの土地の大地主であったことと考えあわせて、あるいは六角家から所領としてこの破塚は一帯の地を小嶋家に与えられていたのかもしれない。

そしてこの小嶋定安の曽孫の代に「広瀬」と改姓しているのである。すなわち広瀬伊左衛門定行、広瀬弥左衛門定季、広瀬弥兵衛定盛、広瀬八郎右衛門定俊の四兄弟がそれである。家紋も菱之内一文字から「有故広瀬家紋丸之内三目改」となっているところからみると、この代になにか改姓とともに大きな変革や新しい出発がななさ

れたことを物語っているようである。というのは、豊臣と徳川とが天下を争った戦いに徳川方に味方した伊達政宗が、その功によってこの地方を所領として与えられ（約五千石）、市辺はその仙台伊達藩所領の飛地となり、隣村の平田村に代官所が置かれるようになったからである。広瀬家もそれにともなって伊達藩の家臣になっている。小嶋から「広瀬」への改姓については、仙台の広瀬川にちなんで伊達侯より広瀬の姓を与えられたという説もあり、またいちはやく広瀬と改めて恭順の意をあらわし伊達藩に取り入ったという説もあり、その理由は詳らかでない。然し一大政治的変革期に、如何に家を安泰させ、いかに家族、縁者とともにきりぬけるか、それこそ一大緊族であるがゆえに一層容易なことではなかった筈である。したがって改姓といい、改紋といい、みなこの必死の努力のあらわれではなかったかとも思われるのである。ともかくも小嶋家はこの時から広瀬と改姓し、家紋を丸の内の三目と改め、仙台伊達藩の家臣となって新しい時代を迎えることになったのである。

四

広瀬家の初代は小嶋弥右衛門定時の四男八郎右衛門定俊で、近世初期の政治的混乱期を見事に乗りきり、広瀬家の礎を築いた人である。定俊は広瀬家の世襲名を八郎右衛門と定め、市ノ辺に居を構えたが、これが市ノ辺の広瀬一統の宗家になるのである。現在の市ノ辺の本家広瀬家跡の東には広大な八郎右衛門屋敷跡があり、江戸から明治へかけて江州屈指の富豪であったことを物語っている。然し昭和初期に逼塞してブラジルに移住し、今は往時の盛大さを偲ぶものとして、ただ屋敷跡が残されているだけである。

本家広瀬家はこの定俊の三男広瀬八郎右衛門方俊が、その三男方救を分家させて世襲名を新五郎と定めたのにはじまるのである。広瀬又治臣救は、その自著である広瀬家の「家譜書出」の初代にこの広瀬新五郎方救を置いているのもその故である。この本家広瀬家は分家と同時に大庄屋待遇を受け、苗字、帯刀を永代にわたって御免の扱いをうけているのが注目される。おそらく分家の際に武家から郷士にと家格がかわったのであろう。然し何分にも大地主である上に、家業として酒造業を営んだので殷賑をきわめたようである。酒銘は「白妙」、「玉泉」、「若緑」で千石酒造と呼ばれたという。ちなみに広瀬新五郎方救は明和五年五月に金三百両、安永四年十一月に金六百両、安永五年十一月に金百両という莫大な金額を伊達藩に献上しているが、これは余程の富豪でなければ不可能なことである。然もこれは新五郎方救一代にかぎらず、代々の当主も慣習のように献上しているのをみても、いかに本家広瀬家が裕富であったかを物

語っているのである。その上、新五郎方救の嫡子新五郎方好の代に伊達藩の依頼で茶の栽培をはじめ、煎茶製法を学んで献上しており、伊達藩にとって重宝な家臣であったことがわかるのである。

そしてこの新五郎方救の次男方造が世襲名を又治と定めて、本家広瀬家から分れて分家したのが、広瀬恒子の実家である広瀬家のはじまりなのである。市ノ辺で本家を北広瀬、分家を南広瀬と呼ぶのはこの頃にはじまった。又治方造については、「南広家譜」に

若年ヨリ文学ニ志アリ広瀬新五郎ヨリ分家ス薬種ヲ売買ス京坂ノ薬種商人ト取引常ニ是アリ京都二条室町ニ一軒ヲ設ケ常ニ薬品ヲ入置又大津大坂ニテ米ヲ売買ス所謂相場報合ナリ毎次利ヲ得ズト云フコトナシ依之家大ニ富殖ヲ致ス身分大庄屋並許可ヲ蒙ル男辰三郎ヲシテ京都祇園小堀山本氏ノ跡ヲ求メシム老年ニ及ビ常ニ是ニ居住ス山本氏卒スルノ後帰宅八十五才ノ寿ヲ祝シ眷族懇友ニ送ルニ好事不如無ノ書ヲ自書シ以テ配送ス天保七丙申七月十九日卒ス行年八十有五法号徳樹院仁与慈徹道仙居士

とあるように、分家するや身分は大庄屋扱いを許され、大地主である上に商売に専念し、みるみる利潤を貯えて、宗家や本家を威圧するまでに発展しているのである。ここで特に注意しておかねばならないことは、丹毒丸という薬を製造し、さらに薬種の売買をはじめたため、京都二条室町に薬種倉庫を設けたことと、三男辰三郎憲救を京都祇園社の社家山本氏に養子に出したことで、京都と深い関係が出来たということである。さらにいえばそのために京都の祇園で放蕩し、その芸者を妾として囲うという遊びをおぼえ、代々の当主もまた当然のようにそれに習うという風が生まれ、そのことが結果として島崎藤村との関係において広瀬家の名を歴史にとどめることになった広瀬恒子の誕生をみるにいたったということである。然し又治方造は商売で多忘な一面文人趣味の持主であったといわれるが、これも南広瀬家の家風として後世に色濃い翳を落すことになるのである。方造の嫡子櫨之輔韶救は「南広家譜」に「父之業ヲ継テ薬種売買ス家道日ニ盛大」とあるように一層この家業を飛躍させた人であり、また「天保八酉年献金知行頂戴天保七申年藩国登ラズ国民餓孚ス依為救助調達金数藩ヨリ命ゼラル毎次大金ヲ出シテ調達セラル」とあるように仙台伊達藩に大金を献納して、所謂天保の大飢饉救済に協力するという豪放な人柄であったらしい。したがって後継の嫡子又治匡救はこの父の功によって大庄屋格から一段高い地位に昇進している。家譜に「弘化元辰年大番組入是迄大庄屋格之処父ノ名ヲ以テ周旋昇進シ」とあるのがそれである。然し何分にも匡救の代は明治維新前夜の動乱の時で、そのための心労と、一方、本家新五郎方及び縁戚の小鳩五郎八方の当主が若年等の理由で後見を依頼されたための心痛で、嘉永四、五年頃癇癖に苦しみ、家督を長男の

新太郎方伸に諭って養生につとめたが、その方伸また医救に先立って病没するという苦悩の生涯を送った人であった。明治五年にその息方伸のあとを追うように六拾三才で病死している。

さて新太郎方伸、つまり恒子の父については「南広家譜」に

嘉永四亥年秋父医救依病気家督相続文久二戌年秋京都屋敷御勘定役勤務元治元子年五月退役此間京都平穏ナラズ広幡殿御守衛ヲ勤ム下立売御門警衛勤務慶応元丑年七月ヨリ九月迄近衛殿御守衛勤務後主家王命ニ抗スルヲ以テ帰農明治四年病死行年三拾九才

とあるように家督を相続しても、その室すみ（本家の広瀬好和の女）を市ノ辺において、仙台藩京都屋敷に勤務するという生活を送っており、この京都時代に祇園の芸者ではなかったといわれる藤井なかに生ませたのが広瀬恒子なのである。そして新太郎方伸の嫡子が敬文つまり又治椹之助である。椹之助はその妻つぎが京都祇園社の社家山本憲文の女であったということもあろうが、家業の薬種問屋の関係上、二条室町の薬種倉庫の検分をかねてたびたび上洛し、文人墨客との交遊もあったが、むしろ遊蕩三昧の生活を送ったといわれている。然し生来の病弱であったため、これが禍いして結核になり、遂にキリスト教に入信し新島襄の手で受洗、一家も兄の回復を願いそろって洗礼をうけている。然しこの椹之助のキリスト入信という事件は連綿と続く広瀬家の歴史に、まさに画期的な出来事だったに違いない。いかに広瀬家が商家で利に聡く時流に敏感であるとはいえ、何分にも場所は市ノ辺、家は地方屈指の名門で、時代は明治初期のまだ封建色一色に塗りつぶされていたあの混迷期の頃のことであるから、おそらくこの地方を揺がすような大事件であったことだろう。だが、椹之助がどうして新島襄を知りキリスト教に接近したかの経緯については不明な点が多い。一説には同志社に学んだためという説もあるが、同志社の現存資料の中には椹之助の名前は見当らないので、同志社に入学しなかったか、または病弱による中途退学のいずれかであろうが、新島襄や、わけても徳富蘇峰との親交から考えると同志社英学校に学んだという説には魅力がある。然し家業の薬種問屋の仕事のため上洛し、その都度、文人墨客つまり今日の所謂文化人と交遊するのがこの広瀬家の家風であったから、その関係で自然と知りあい親しくなったととるのが穏当な見方だろう。こうして一家あげて兄椹之助の回復を祈ったが、椹之助は結局病気に勝てず二十九才の若さで世を去っている。

そこで病没した兄にかわって又治を襲名し家を継いだのが弟の熊治である。この熊治はもともと大の耶蘇嫌いであったが、兄の病気回復のため仕方なく入信、したがって兄の死後早速に仏教に復帰しているが、これは単に耶蘇嫌いという理由からのみでなく、やはり

名家広瀬家のキリスト教改宗という事件がこの地方に大きな波紋をまきおこしたことに対する処置の一つとみなければならないだろう。然し南広瀬家はこの熊治の時代に全盛を迎え、したがって世俗名の又治もこの熊治をさす名前のようになってしまうのである。今でもこの地方では又治といえばこの熊治のことになっている。すなわち熊治は大地主、薬問屋、米相場師の外に滋賀県栗太郡草津村大路井（現在の草津市大路一丁目）に約三百坪の倉庫を建てて、新しく醤油の醸造と販売に乗りだし、熊治自身も妾の元祇園の芸者織田きしとそこに移り住んで経営に努力し、たちまちこの地方の需要の大半を握るという状態で、宗家の広瀬八郎右衛門家や本家の広瀬新五郎家を圧倒してこの地方最大の資産家に発展するのである。然も熊治はその巨大な利潤で、趣味である書画骨董に手を出し、たびたび上洛しては同好の士と交遊し名品を買い漁ったという。だから市ノ辺の宏壮な本宅には母のすみ、兄の未亡人つぎ、それに妻の美津と子供の俊吉、宇のと、時々学校の休みに帰宅する妾腹の妹恒子、そして使用人たちが住んでおり、金に何の不自由もない気楽な生活を送っていたのである。したがって恒子が明治女学校時代に師の星野天知の妹勇子を、神戸時代に島崎藤村を迎えて親味の世話しても、家中は徒然無聊の慰みと主人のいない気安さで大歓迎で受け入れたのである。いかに磨揚で闊達な家風であったがわかるのである。熊治は大正七年四月二十二日に六十一才で京都で亡くなっている。その墓碑銘に

君諱敬行初称熊治後改又治号翠舫近江国蒲生郡市辺村広瀬君新太郎次子也以安政五年十二年二日生明治十六年家兄病歿於是嗣家改称其仙台藩士有故帰農至五世服賈君承先業更創設醤油廠於草津専力干商家道益盛業暇嗜茶研鑽多年進二級初段天下棋客過此地者莫不訪問又好書画屢遊京都優遊自娯一朝罹疾遂不起実大正七年四月二十二日也享年六十有一葬于先塋之次配山岡氏誕一男一女男承祀女適人泉下亦可以無憾矣大正八年三月平安隠者謹并書

とあり、熊治の生涯を簡潔、適切に語っている。

熊治の長男俊吉は幼にして神童の誉たかく、関西放浪の途次、つまり明治二十六年の三月初旬、俊吉の叔母恒子を慕って立ち寄った若き日の島崎藤村に可愛がられ、作文の添削をうけたり、読書の指導をうけたりしてその交流は長く大正時代まで続いた。長じて、叔母恒子の嫁ぎ先の東京の杉山家の世話になり東京商業学校（現在の一橋大学）を卒業している。妹の宇の（本家の広瀬新五郎に嫁す。現在の当主広瀬雄一氏の母）もここから女学校に通っている。然し俊吉はその生来の苦労知らずの育ちの良さと、狷介の性格ゆえに、東京から帰郷後は草津にあって父の仕事を手伝ったが役に立たず、

むしろ使用人のような立場に立たされており、まして大正七年父の死後は父熊治の妾織田きしと番頭できしの養子になった西市ノ辺出身の森広道の二人に店を切り廻わされ、瀬田の出張所をやっていた叔父の新治も病歿していて孤立無援の状態であったため、その家業の相続の面倒さを嫌って店を現在の大丸醤油の藤井昌助に売り渡し、京都岡崎の豪壮な鳥獲邸を購入して転居、その上郷里市ノ辺の七百坪の宅地に、母屋、離れ、土蔵、武器庫、納屋、厩等が建ちならんだ大邸宅をも売却し、趣味であった書画の蒐集と気ままな放蕩の生活を送ったのである。だが持ち前の人の好さから騙されて相場に手を出して失敗し、遂には巨万の富を蕩尽して倒産、さしも連綿と続いた広瀬家もこの俊吉の代で、その栄光の歴史に終止符を打ったのである。然も戦争中疎開のため、この京都岡崎の家も売りはらって、故郷の市ノ辺に帰省、終戦後は幾多の辛酸をなめて、その妻蕗枝氏や末娘葉子氏の努力で千八番地にともかくも家を新築して住み、昭和五十年十月十八日に老衰で死亡している。この俊吉の妹宇のの嫁ぎ先である、本家の北広瀬家も、宇のの主人新五郎の時代に、二度にわたっての新酒の腐敗と、その放漫経営が原因で人手に渡り、現在は土蔵を一つ残すのみで、往時の盛大さは見る影もない状態である。ただ母屋を移転して建てられたという滋賀県竜王町の小学校の講堂が昔の俤を今に伝えているという。そして俊吉の妹宇のも昭和五十年十二月十一日に兄のあとを追うように老衰で亡くなっているのである。

五

ところで広瀬恒子であるが、戸籍名は津祢で、つね、恒とも書き、恒子を一般的に用いている。号は秋蘿で島崎藤村が与えたものという。父の新太郎方伸が京都時代に妾とした藤井なかを母として、明治元年九月二十日、京都で生まれる。母の藤井なかについてはその生いたちが判然としないが、祇園の芸者であった頃父の方伸と知りあい、京都生活を送っていた父に囲われて恒子を生んだとするのが一般的な見方である。

恒子は市ノ辺の広瀬家に引き取られ実子同様の愛情で養育されるが、それがいつ頃のことであるか、わからないのが残念である。広瀬家累代の菩提寺である知恩院派の大蓮寺に残されている明治三年の宗門開帳には恒子の名のみが記載されていないので、この時点ではまだ恒子が広瀬家の一員になっていないことがわかる。したがって翌四年九月二十一日に父方伸の病歿により、にわかに家督を継いだ方伸の長男、つまり恒子の長兄にあたる稙之助の時代と考えるのが穏当であろうが、これとてそのいつ頃であるかについては不明で

ある。ただ恒子の同志社女学校入学時から逆算すると明治初期ということになる。また恒子が広瀬家に引き取られた理由については一層判然としないが、明治三年に夫の方伸をうしない、翌四年に義父の匡救を亡くし、また夫方方伸との間にもうけた二番目の子供、つまり椹之助の妹のとはめを早世させたすみがそれらの菩提をとむらう慈悲心から、父の方伸を失って京都で細々と暮す藤井なかと恒子の親子の生活を哀れんで恒子を養女として引き取ったとも考えられるし、また恒子の兄の椹之助の病気のため、新島襄に導かれて入信したキリスト教の福音の教えにしたがってこの哀れな運命の腹違いの妹を椹之助が引き取ったとも考えられるのである。ちなみに椹之助は父の方伸にかわって何度も上洛しており、その折に父の妾の藤井なかを訪ねて幼い恒子を可愛いがって遊んでやったということもあったのではあるまいか。こうみてくると恒子の広瀬家に迎え入れられた経緯はともかくとして、金に何の不自由もなく、信仰厚く、一家皆仲が好いという温かい家風が、恒子を引き取り、実子同様に可愛がるということにつながるように思われるのである。そしてこの恒子が意志強く男まさりの女丈夫であった反面、また親切で世話好きで恩義に厚いという性格の形成に、京都の実母を離れて父の里の市ノ辺の宏壮な邸宅で、この優しい家族に囲まれて育ったことも、一つの大きな要因をなしているのである。わけても恒子はその生涯を、つまり学業を、職業を、その家庭をキリスト教とともに歩むことになるのだが、その機縁はこの広瀬家の一員であったことから生じたものであることを銘記しておかねばならないだろう。

もっとも椹之助は明治十六年に病気にかてず二十九才の若さで死亡するが、あとを継いだ次兄の熊治はその磊落な性格から恒子を温かく庇護し、明治の女性としては可能なかぎりの最高の教養を身につけさせたのである。すなわち先ず恒子は新島襄との関係で同志社女学校に入学するが、同校はその頃普通科だけで専門部が設置されていなかったので、明治二十二年六月二十六日に卒業すると、早速に上京してその年の九月に開設されたばかりの明治女学校高等科に第一回生として入学している。そして同校普通科の教員を兼ねて、修身、歴史、数学を教えたという。在学中は星野天知の教えをうけ、薙刀道初段を認定され、修道賞を与えられた才媛である。明治二十五年七月二十日卒業している。然し何分にも妙齢で俊才の恒子であるから、師である若き独身の星野天知との間に、師弟をこえた微妙な愛情が芽生え、然もそのことで深く傷つき、後にこのことが遠因で、天知と藤村が恒子をめぐって惹起する所謂吉野山事件にまで発展するのだが、これについては別稿で詳述したのでここではふれない。恒子は、そのど、同志社女学校時代の舎監であった和久山きそ子の招きで、神戸に転居している。これは和久山が、当時、神

戸の頌栄保姆伝習所長のハウ女史のもとで通訳兼保母していた関係と、父の妾腹である自分の将来を考えて、自立の生活を送ることを決意したためといわれているが、それを可能にしたのは恒子の努力も当然ながら、なんといっても兄熊治の財力とその妹思いの温かい性格とが大きな比重を占めていることは、改めて述べるまでもあるまい。今も広瀬家には熊治が恒子の指の怪我を心配して出した手紙が残されているが、細かい配慮と優しい妹への心情の滲れたものである。

頌栄在学中は所長のハウ女史の信頼厚く、同所高等科卒業後は選ばれて、前橋市北曲輪町七十八番地に新設の清心幼稚園の主任として明治二十八年十二月に赴任し、ミス・メリー・シードの片腕となってその発展に献身している。明治三十一年二月二十八日、恩師の故本普治の媒介で、岡山市壱番地に住み和立中学校の教師をしていた杉山宜義の後妻となり、二人の子供を生んでいる。杉山には先妻の残した子供が一人いたが、我が子以上に可愛がり義母であることを気づかせなかったという。おそらく恒子自身の広瀬家で受けた愛情深い生活の反映であろうと思われる。杉山の母校早稲田の教師として転任にともない上京後は、郷里市ノ辺の兄熊治の子供の俊吉と宇のとを預って世話をし、東京の学校に通わせてその恩義に報いているのも、恒子の人柄のゆえであろう。

昭和二年二月一日に、ちょうど一週間前の同年一月二十四日に亡くなった夫杉山宜義のあとを追うように、五十八才で死亡している。葬儀にはハウ女史が愛弟子の死を悼み、老躯をおして上京し会葬している。まことに恒子は頭脳明晰で強い意志と広い抱擁力と温かい愛情の持主で、まさしく明治の生んだ代表的女性の一人というべきではあるまいか。

注　本稿では、藤村と恒子について新しい資料により論述する予定にしていたが、限られた紙数の関係で割愛せざるを得ない。ただ国書刊行会出版の拙著「島崎藤村」や島崎藤村研究会から出している「島崎藤村研究」に発表した小論を参考にしていただければ幸甚である。